

イヌの精巢と精巢上体

東京大学医科学研究所獣医学研究部 第14回獣医病理学研修会標本 No.207



本症例は *Brucella canis* (以下 *B. canis*) による流行性流産の発生したビーグル犬コロニーの種牡犬で、1971年6月に交配したところ相手の雌が妊娠後期に流産した。同年11月触診で精巢あるいは精巢上体の腫張を認めたほか異常は認められなかったが、血液培養では1972年8月 *B. canis* が分離され、1973年4月安楽死後剖検した。*B. canis* は精巢上体・前立腺・脾・腸骨および膝窩リンパ節から分離され、同菌に対する血清凝集抗体価は1:100であった。

肉眼的所見：左右両精巢の萎縮著明、白膜の肥厚も顕著で、剖面は全体に褐色を呈し濃褐色小斑の散在が認められた。精巢上体はやや大きく、前立腺は腫大し表面の凹凸著しく、剖面の一部に発赤が認められた。全身各部リンパ節の腫大も著明で、大豆～ウズラ卵大であった。とくに、浅頸および膝窩リンパ節は腫大著しく、腸骨リンパ節では出血が認められた。脾は質度を増し、脾尾辺縁部に暗赤紫色小豆大の出血梗塞様部を認めた。

精巢・精巢上体の組織所見：精巢全体にわたり細精管の萎縮が著明であるが、小葉により病像は異なってい

た (Fig. 1)。ある小葉では Leydig 細胞の増殖が著明で、小葉全体にこの細胞が満たされていた。Fig. 2 は Masson Trichrome 染色—Goldner 変法の像で、Leydig 細胞は著明に萎縮した細精管を取り囲むように、結合線維で区画されたいくつかの小集塊を形成しながら繁殖していた。別の小葉では細精管の顕著な萎縮のほかに、間質増生と浮腫が明らかで、Leydig 細胞はしばしば島状に増殖していた。また一部の小葉では細精管の萎縮のみで、まれにリンパ球の集簇が見られた。

精巢上体では軽度のリンパ球浸潤をともなう間質の増生が著明で、一部管腔の狭窄も認められた。

このほかの雄性生殖器では、前立腺で間質の増生にともなう腺腔の狭窄・消失が観察され、間質にリンパ球浸潤が顕著で組織球集簇も散見された。

本症例は罹患後の経過がかなり長いと推定されるので、本病変は終末的な病像であると考えられる。

病理組織学的診断：*Brucella canis* による Leydig 細胞の巣状過形成および間質増生をともなう精巢萎縮。